

福井 健策（ふくい・けんさく）先生

弁護士・ニューヨーク州弁護士  
骨董通り法律事務所

弁護士（日本・ニューヨーク州）/日本大学芸術学部 客員教授

1991年 東京大学法学部卒業。1993年 弁護士登録。

米国コロンビア大学法学修士課程修了

（セゾン文化財団スカラシップ）など経て、

現在、骨董通り法律事務所 代表パートナー。

著書に「著作権とは何か」「著作権の世紀」（共に集英社新書）、

「エンタテインメントと著作権」全4巻（編集、CRIC）、

「契約の教科書」（文春新書）、「ネットの自由」vs. 著作権」

（光文社新書）ほか。専門は著作権法・芸術文化法。

クライアントには各ジャンルのクリエイター、劇団、出版社、

プロダクション、音楽レーベルなど多数。

東京藝術大学ほか非常勤講師、think C 世話人、国会図書館審議会ほか委員・理事を務める。

<http://www.kottolaw.com> Twitter: @fukuikensaku



### 〈講義概要〉

芸術文化法、著作権法を専門分野とし、エンタテインメント産業の発展に尽力する弁護士福井健策氏が、デジタル時代の著作権について講義を行った。

講義では、日本の著作権に関する重要な動きの一つである TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）について、知的財産面における協定の概要、問題点、今後の課題を分かりやすく解説した。まず、米国政府が提示している知的財産要求項目の代表例として、保護期間の延長、非親告罪化、法定損害賠償の3項目を中心に詳しく説明し、知的財産要求項目を受け入れた場合の日本文化へもたらす深刻な影響について訴えた。

また、「何が最適の知財ルールか」「TPP が最適の乗り物なのか」「情報のルールメーカーは誰か」という3つの問いかけを示し、情報流通を促進しながら創作者に収益還元できる新しい日本型モデルの構築の必要性や、変化の激しいネット社会のルールを法律や条約ではなく柔軟性のある日本向けのルールで規制していくべきなのではないか等、重要な課題を提示した。学生はこれからの社会や文化のあり方に直結する、知的財産や著作権の問題について理解と関心を深め、日本の文化や情報流通の未来について真剣に考える機会となった。

## 《受講生の感想》

TPP に対する視野が広がりました。TPP によって私たち自身のコンテンツや知財に対しての動きが大きく変わり、大きな影響があるということを、保護期間延長や非親告罪化の話から実感することができました。今回の講義をきっかけに関心を持ち、自分なりの考えを構築しようと思いました。

立命館大学・産業社会学部・3 年生

コンテンツに関する今起こっている問題について非常に分かりやすく解説していただいたので、しっかり理解することができました。著作権の延長や知財のあり方というのは、日本のポップカルチャーが日本経済において重要視されている今、社会全体で見直さなければならないと思いました。

立命館大学・映像学部・2 年生

著作権はできるだけ長く著作者、またはその親族にあるべきだと思っていたが、古い作品の活用ができないといったデメリットがあり、多くの人々が二次創作への利用ができないということで、売り出し方、産業のあり方は時代に応じて変化していくべきだと考える。そのため権利や知財などの法というものも時代に応じてうまく適応することが重要だと思った。

立命館大学・映像学部・3 年生

著作権問題が日本国内のものではなく、海外と繋がっていることや、TPP による日本と海外との関係、これからのメディア、コンテンツなど、色々なことについて考え直さなければならないと思いました。今の時代にあったよりよい内容を考える必要があることを感じました。

立命館大学・産業社会学部・2 年生

インターネットや電子機器の普及に伴って、著作権に関する規定に注目していく必要が高まっているのだなと感じました。知的財産は無形であり、目には見えないものであるため、私たちは無自覚のうちに侵害していたり、軽いものであると考えがちだが、制作者の唯一無二の創造物（財産）であることを忘れてはいけないなと思いました。

立命館大学・産業社会学部・3 年生

青空文庫の様々な活用法を知りました。権利者が分からず、保護期間が切れているかどうか分からないために青空文庫に出典できないという問題が難しいところだと思いました。しかし、青空文庫を通して目の見えない人や外国人など、今まで本に触れにくかった人たちが日本文学を楽しむことができるようになっていくのは素晴らしいことだと感じました。

立命館大学・映像学部・2 年生

